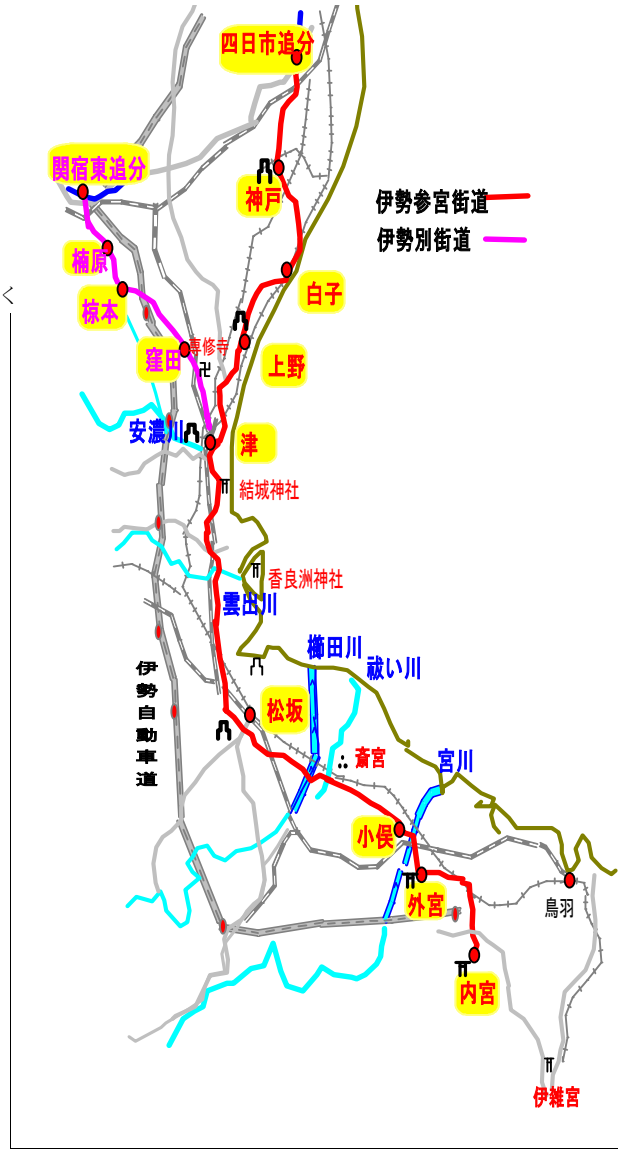
街道を歩く

伊勢参宮街道 (19里18町)伊勢別街道 (5里半)

0：表紙
①：日永追分-高岡-神戸
②：神戸―白子―磯山
③：磯山―上野―江戸橋
④：江戸橋―岩田橋―高茶屋
⑤：高茶屋―島貫―六軒
⑥：六軒―松坂市街―金剛橋―上川町
⑦：上川町―櫛田橋―斎宮
⑧：斎宮―明星―小俣
⑨：小俣―外宮―古市―内宮
⑩-01：関―楠原―椋本―高野尾
⑩-02：高野尾―窪田―一身田―江戸橋
99：ウォーク記録

伊勢参宮街道
弥次・喜多さんも歩く



伊勢参宮街道

東海道と四日市市の日永の追分で分れ伊勢湾岸沿いに神戸（かんべ）、白子（しろこ）、上野、津、松坂、小俣、山田（伊勢市）を経て内宮に至る19里18町（約76ｋｍ）の街道。

この街道は江戸橋で伊勢別街道、津で伊賀街道、松坂で和歌山街道、月本で奈良街道（旧伊賀街道）、六軒で初瀬街道などと分岐（合流）した。主に参宮者に利用されたので伊勢参宮街道といわれた。

もともと伊勢神宮は皇祖神を祀る神社で一般の人は参拝することが出来なかったが天皇、貴族の勢力が衰える平安時代以降、武士、庶民に伊勢信仰が広がり、伊勢に向かう人の数が増え、その道筋も定まってきた。江戸時代には街道が整備され、“おかげ参り”の流行により街道は一層賑わった

伊勢参りを普及させたのは“御師”と呼ばれる人たちであった。地方に行き布教活動を行い、各地に”伊勢講“という組織を造り組織的に伊勢参りを進めた。諸国からの参宮者を自宅で神楽を行い、お祓麻を与え、土産を持たせ、参拝や見物の案内をした。現代の旅行代理店と旅館を兼ねた業務をしていた。

江戸時代60年周期で熱狂的に行われたのが“おかげ参り”。神恩のおかげ、人々のおかげであった。家族や、周囲に無断で出かけた“抜け参り”も流行した。

[弥次・喜多]さんも日永の追分からこの街道で伊勢参りをした。

伊勢別街道

このコースが開かれたのは平安時代の仁和2年(886)鈴鹿峠が開通し東海道となったころ。東海道関宿の東の追分で分れ、楠原、椋本、高野尾、窪田、一身田を経て江戸橋に至る5里半（約22km）の街道。

江戸時代脇往還として整備（楠原、椋本、窪田に宿が置かれる）され京都方面からの参宮旅人で賑わった。

以前は楠原、椋本から南に安濃川沿いを下り殿村付近に至った。安濃川の渡河を避けるべく室町時代から今の椋本―豊久野（今高野尾あたり）―窪田経由に変わったという。

足利義持伊勢参宮をした応永25年（1418）にこのルートだたという。（随行した花山長親院の“耕雲紀行”）伊勢別街道と呼ばれたのは明治以降のこと、それまでは「山田道」、「いせみち」、「伊勢参宮道」と呼ばれていた。

都が奈良にあった時代は宇陀―名張―青山峠―が一般的だったが都が京に移ってからは東海道鈴鹿峠越え南下するルートが一般的になった。

「延喜式」によると
今回の街道筋には、古代の市村駅（津市殿村説）、飯高駅（松坂市駅部田）、度会駅（小俣町）が設置されていた。京から椋本を経てから安濃川を下り岩田付近で街道に合流し斎宮に向かったといわれる。

参考
桃花台中日文化ｾﾝﾀｰ「街道」を歩く講座テキスト
三重県の歴史散歩上下　株式会社山川出版社
歴史散歩（総集編）　津市教育委員会文化課
みえ歴史街道ｳｫｰｷﾝｸﾞﾏｯﾌﾟ　伊勢街道　三重県生活部文化課
お伊勢参り　神宮司庁　伊勢神宮崇敬会
伊勢志摩を歩く　皇學館大学出版部
斎宮物語　明和町教育委員会
東海道膝栗毛(下)　十辺舎一九作麻生磯次校注　岩波書店
大黒屋光太夫　山下恒夫著　岩波新書
歴史街道散策マップ　津歴史街道構想推進実行委員会
地図　国土地理院 1/2500　（四日市西、鈴鹿、白子、津東部、津西部、松坂港、松坂、明野、伊勢、亀山、楠本、大河内、大仰）
その他市町発行史跡冊子、観光協会発行冊子、ガイドマップなど

H16/4―H16/11
あきやま　ゆたか
H17年2月